

# 大学における障害を持つ学生に対する配慮について

## -- カナダの4大学の事例をととして

著者	白石 淳
雑誌名	北方圏生活福祉研究所年報
巻	7
ページ	121-129
発行年	2001
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001509/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001509/</a>

# 大学における障害を持つ学生に対する配慮について

## —カナダの4大学の事例をととして—

白 石 淳（北方圏生活福祉研究所）

### 抄 録

カナダの大学における障害を持つ学生に対する配慮のあり方について調査した。その結果、大学では、障害を持つ学生に対して障害がない学生と同じように、自立して学生生活を快適に過ごすことができるように、物理的なバリアフリーをはじめ、さまざまな点でサポートサービスが行われていた。その基盤には高い人権意識があるものと考えられる。今後わが国においても、障害を持つ学生に対する適切な配慮が必要である。

キーワード：障害学生、バリアフリー、高等教育、学校施設

### I. はじめに

今日のわが国においては、少子高齢社会への移行などさまざまな変化が生まれており、このような状況に対応するために、あらゆる社会システムの基礎となる教育の重要性が指摘されている<sup>1)</sup>。この教育を行う学校施設においては、一人ひとりが生き生きと学習や生活を行うことができる豊かな施設環境が確保され、教育内容・方法の多様化への対応など学校教育を行ううえで必要な施設機能を備える必要がある<sup>2)</sup>とともに、地域社会における多様な生涯学習活動などの場としても利用される公共的な施設である<sup>3)</sup>ところからの整備をする必要がある。したがって、学校施設の整備においても、すべての面に対して利用しやすい施設設備の環境が配慮されなければならない。すなわち、高齢者や身体障害者などの人々も円滑に利用できるように学校施設を整備する必要性が認められ、平成6年に文部省は、学校施設においても積極的にバリアフリー化を図る必要があると通知している。

ところで、北アメリカの大学においては、障害を持つ多くの学生がさまざまなサポートを受けながら、大学の通常の課程で学習するなど大学生活を送っている。アメリカ、カナダ等においては、初等・中等教育段階においても障害を持つ児童・生徒と障害を持たない児童・生徒と一緒に過ごすことが、両者にとって最もよい教育であるという見方がなされ、インクルージョンの立場に立った教育が行われている<sup>4)</sup>。このことは就学前教育から高等教育までの一貫した考え方であり、実際の学校教育においてはそれぞれの学校種に適した障害児・者にふさわ

しい施設設備の面や支援の面などでサポート体制が整備され、教育が展開されている。このように、北アメリカでは、サポートを必要とするが、障害の有無にかかわらず誰でも同じように学生生活を送ることが、通常であるという考え方が一般的である。

ここでは、わが国よりも障害を持つ学生に対する配慮が進んでいると考えられる北アメリカ<sup>5)</sup>のカナダの大学における事例をととして、障害を持つ学生への配慮のあり方について考察する。とくに身体障害者に対する物理的な障壁の解消、つまりバリアフリー化に注目して、VICTORIA大学<sup>6)</sup>、BRITISH COLUMBIA大学<sup>7)</sup>、CALGARY大学<sup>8)</sup>、SIMON FRASER大学<sup>9)</sup>における事例調査をもとにして検討する。

### II. 障害を持つ学生に対するバリアフリー化

バリアフリーという言葉は、もともとは建築用語として使用されはじめたので、建物内の段差の解消など物理的な障壁の除去という意味合いが強いが、今日ではより広く障害者の社会参加を困難にしている社会的、制度的、心理的等の障壁の除去という意味で用いられている<sup>10)</sup>。実際に障害者を取り巻く社会環境においては、さまざまな障壁があるが、具体的には物理的な障壁、制度的な障壁、意識上の障壁等が存在する。これらの障壁を除去して、すなわちバリアフリー化して、生活環境の改善などを行うことが、すべての人の参加による、すべての人のための平等な社会づくりの基礎的な要件となるものと考えられる。実際のバリアフリー化の推進では、障害の種類や程度によりその必要とする内容は異なることになるので、それぞれの学生に対応した配慮が必要である。大

学においてバリアフリー化の対象となる内容は、次のような内容があるものと考えられている<sup>11)</sup>。学生の入学前（大学の受験時）に必要とする障害者の「受験に対する配慮」、入学後の学生生活の中心となる「授業に対する配慮」、授業以外の学生生活すべてに関わる「学生生活に対する配慮」などに分けられる。さらに詳細にみると入学前の「受験」については「入学試験前の問い合わせに関する内容」「入学試験に関する内容」、入学後の「授業、学生生活」については「施設、設備、備品に関する内容」「授業や試験における配慮に関する内容」「人的サポートに関する内容」「就職指導に関する内容」などの内容が考えられる<sup>12)</sup>。これらの内容について、大学における配慮のあり方についてみていく。

### Ⅲ. カナダの大学におけるバリアフリー化の状況

カナダの大学では、今日、障害を持っている学生があらゆる課程や専攻において勉学に取り組んでおり、障害を持つ学生に閉ざされているものは多くはないとみられている。実際にも、カナダの大学に通学する障害を持つ学生の在籍数は著しく増加しており、この学生に対する支援のサービスの増加もこれと並行して増加している<sup>13)</sup>。そのサービスの内容は、大学における施設設備面などのハード面だけではなく、学習面や生活の面などのソフト面においても、さまざまな配慮がなされている。

#### 1. 移動面について（写真1～5）

ビクトリア大学では、障害を持つ学生の学校の建物へのアクセスについては、原則的にすべての建物で可能である。キャンパス内のほとんどの道路で、建物へ又は建物の内で、障害を持つ学生は不自由なく自立して移動することが可能である。すなわち、障害者用駐車場の設置、建物の出入り口の無段差化、段差がある場合の段差解消のためのランプ（スロープ）の設置、ランプにおける手すりの設置、建物の出入り口における自動ドアの設置など建物へのアクセスに対しては、自立して行えるように整備されている。建物内においても移動が可能のように整備されており、段差の解消（ランプ化、昇降機設置等）、エレベーターの設置などの配慮がなされている。これらの配慮に対する誘導については、ブロックの設置、点字表示、サインが整備されるなど配慮がなされている。しかし、一部の建物で建築年数が経過している建物においては、建物内にエレベーターはあるもののその設置されている台数は少ない。エレベーターの利用は、障害を持つ学生に対してエレベーターの鍵を貸与してくれるので、それで利用可能となるところもある。これらの、ランプやエレベーターの設置などは、政府の基準に

より整備されているが、一部適切でない、実際には勾配が急などで問題がみられるランプもあり、その改善が課題となっている。

ブリティッシュ・コロンビア大学においても、ビクトリア大学同様に原則的にすべての大学の建物において障害を持つ学生の施設へのアクセスについては、原則的にすべてにおいて可能である。通学に利用するバスループから教室内の移動まで、ほとんど支障無く移動が可能となっている。同様に、カルガリー大学、サイモン・フレーザー大学においても、障害を持つ学生の大学の建物へのアクセスについては、原則的にすべての建物で可能であるとみられる。サイモン・フレーザー大学は、ビー山麓に校舎が細長く建築されているので、大学建物内においては階段が非常に多く、廊下も長いので、ランプやエレベーターが各所に多く設置されており、移動面でとくに配慮がなされており、立地条件により整備の内容や方法が異なることが明らかである。

このように、カナダの各大学においては、公共交通機関のバスループや障害者用駐車場から学校の建物まで、建物内では教室等までの移動面については、無段差化、ランプ化、自動ドアの設置、エレベーターの設置などを行い、障害を持つ学生に対して自立して移動できるよう十分に配慮がなされている。



写真1. 車いす対応の路線バス：キャンパス内のバスループにおいて（ブリティッシュ・コロンビア大学）



写真 2. 障害者専用駐車場：路面にも青色で表示されている（カルガリー大学）



写真 5. 建物内の出入り口：サインがされている（ブリティッシュ・コロンビア大学）



写真 3. 建物へのランプ：大学が山麓にあるので各所に設置されている（サイモン・フレーザー大学）



写真 4. 誘導サイン：誘導がなされている（ビクトリア大学）

## 2. 建物内の設備について（写真 6～12）

それぞれの大学の教室等については、障害を持つ学生のために車いす用スペースが設置されている。さらに、障害を持つ学生用の机やパソコンデスクなどは、机の高さが可動し自由に調節できるなど、それぞれの障害を持つ学生に対応する配慮がなされている。その他、障害者対応ロッカー（ロッカーの下部を使用）、公衆電話、手洗い場、水飲み場、トイレ、カウンターなどが障害を持つ学生が利用できやすいように、高さ、車いす対応などの配慮がなされている。このように障害を持つ学生が利用する施設設備がバリアフリー化されており、それぞれの障害に適した施設設備上の配慮が充分にされいるとみられる。

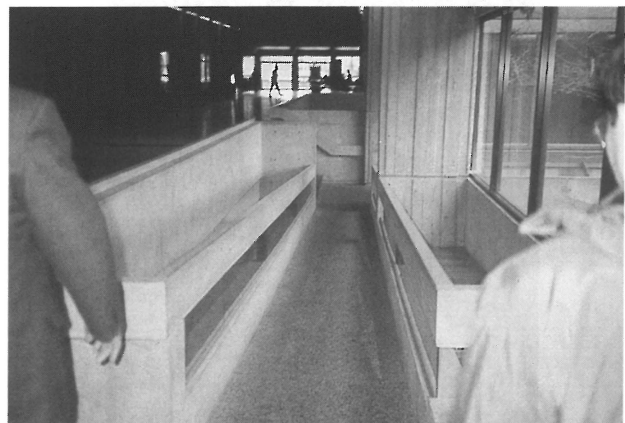


写真 6. 建物内のランプ（サイモン・フレーザー大学）





写真7. 建物内の昇降機：ランプが設置できないところ  
には昇降機が設置される（ビクトリア大学）



写真8. 障害者用出入り口（ビクトリア大学）

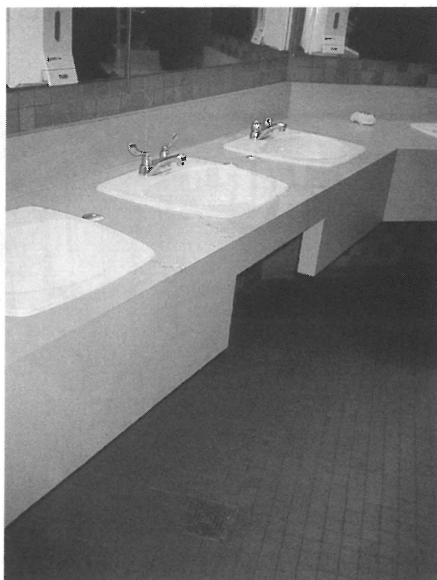


写真9. 障害者対应手洗い場（ビクトリア大学）



写真10. 障害者対応トイレ（カルガリー大学）

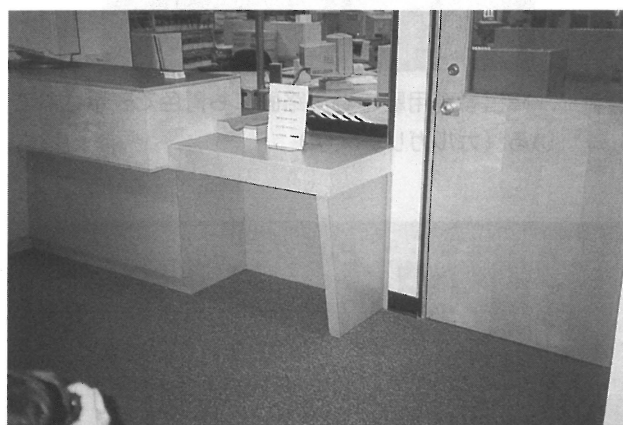


写真11. 障害者対応カウンター（ビクトリア大学）



写真12. 障害者対応ロッカー（サイモン・フレーザー大学）

### 3. 学習面について (写真13～18)

学習の面における障害を持つ学生に対する配慮は、学生の持つ障害の種類や程度によって大きく異なる。この学習の面におけるさまざまな配慮は、障害を持つ学生が障害を持たない学生と同様の内容で学習することを可能にするために行われるものである。例えば、視覚に障害がある学生に対しては点字による試験・点訳パソコンソフト、録音テープなどが利用され、試験時には試験時間を通常よりも長く設定するなどの配慮がなされる。また、聴覚に障害を持つ学生に対しては、レシーバーを利用する、手話通訳者を配置するなどである。上肢が不自由で持つことができない学生に対しては、ボランティアの人が協力する、例えば、ノートや試験の解答を代筆する。宿題をタイプすることなどが行われる。このように、それぞれの配慮は各学生により異なり、学生一人ひとりの障害に最も適した配慮がなされている。

これらの配慮については、大学に対して政府からの補助金があり、また政府などは個々の学生にも直接補助金を支給しているので、学生は手話通訳者や付き添いケア、ノートテイキングなどのようなサービスにその補助金を利用し学習を継続している。

このように、障害を持つ学生の個人的ニーズに応じた施設設備、支援体制などがきめ細かく配慮されている。これらのことについては個人的な内容が多いので、とくに授業に関しては、授業担当教員に障害学生の相談担当の職員が、障害を持つ学生の障害の状態を説明して担当教員と相談のうえ、授業時の配慮や試験時の配慮などの配慮等の取り扱いが検討され、計画、実施される。これらのことは、ビクトリア大学における事例であるが、カナダの各大学に共通する内容である。

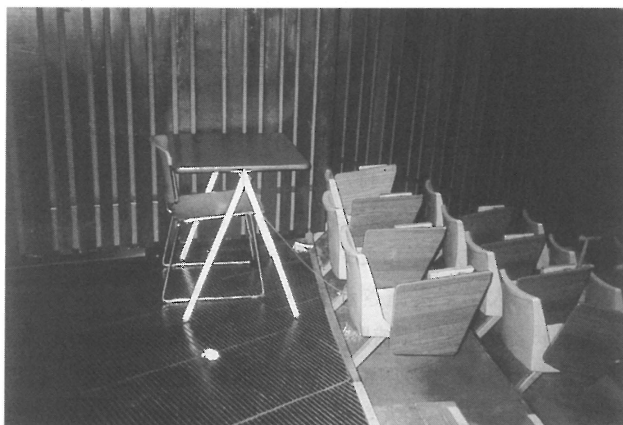


写真13. 障害者対応講義机・スペース  
(サイモン・フレーザー大学)

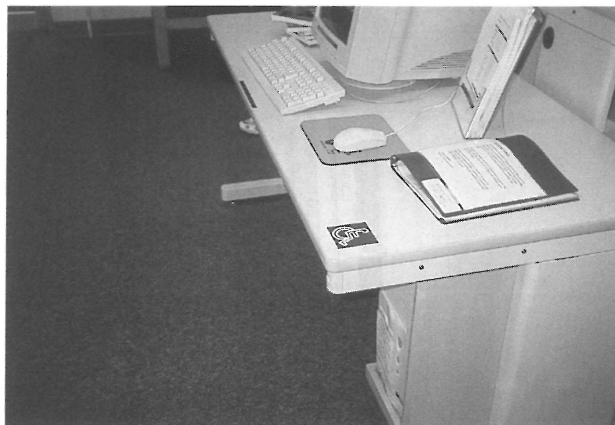


写真14. 障害者対応パソコン：車いす対応で低い  
(ビクトリア大学)

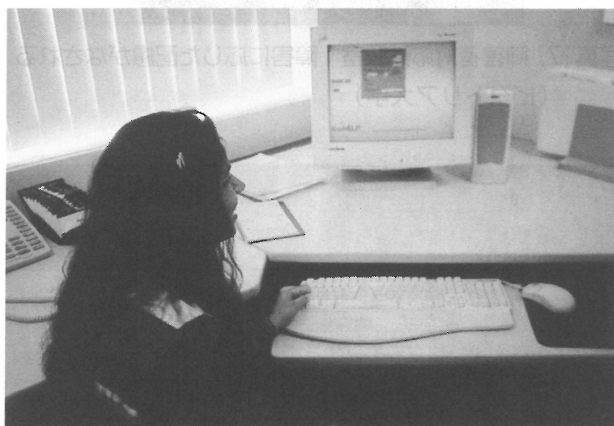


写真15. 障害者対応パソコン：音声対応、点字作成・点字印刷対応 (ビクトリア大学)

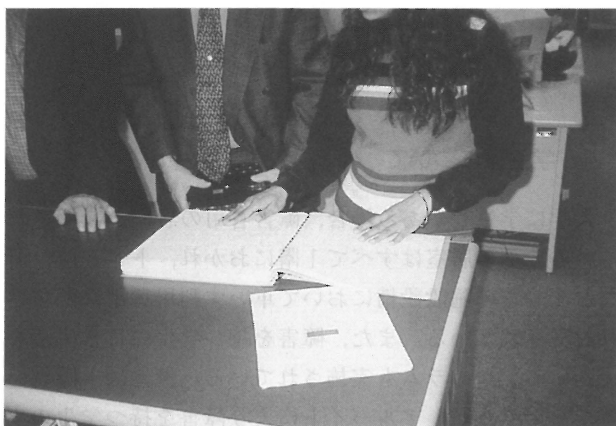


写真16. 点字教科書 (ビクトリア大学)

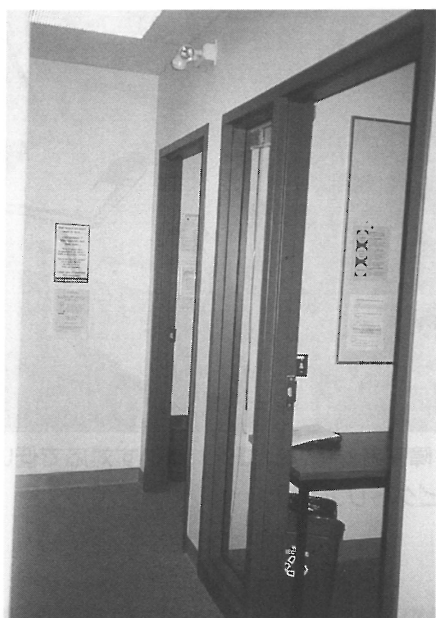


写真17. 障害者対応試験室：障害に応じた配慮がなされる  
(ビクトリア大学)



写真18. 障害者対応連絡用電話  
(サイモン・フレーザー大学)

#### 4. 学生寮について

大学に学生寮がある場合、障害者用の居室が設置されている。その居室はすべて1階におかれ、トイレ、台所などすべての施設設備において車いす利用者用に配慮され設計されている。また、障害を持つ学生の日常生活を援助するプログラムも実施されている。例えば、障害を持たない学生が、アルバイトにより障害を持つ学生の生活をサポート、すなわち学生寮の居室の中や外出時の付き添いなどを行うプログラムが開設されており、費用的にも大学が援助している。これらのことは、ビクトリア大学における事例であるが、カナダの各大学に共通する内容である。

以上のように障害を持つ学生に対するさまざまな配慮

を4つの学生生活の環境面からみたが、各大学でそれぞれガイドラインが作成され各教員に提示されるなど障害を持つ学生に関して全職員の共通の理解が得られている。

これらの障害を持つ学生に対する配慮を整備するとき、例えば物理的なバリアフリーなどにおいては、建築・計画の専門家による意見もあるが、実際に建物・施設を利用する障害を持つ学生が中心として計画が行われることが多い。建築の専門家は、建築物・施設の色統一などに計画の重きをおくことが多いが、視覚障害を持つ学生は、キャンパスに目立つ色を使用して欲しいという要望があるなど建築専門家と利用者の意見とで相違がみられることなどがある。実際に、設計するときには、ランプや自動ドアの設置などにおいても、実際にどのように設置したら障害者の利用で最もよいかと言うことが重視される。しかし、障害の状況も一人ひとり異なるので配慮の後にさらに改善点がみられるときもあるが、障害者の視点により施設を最も利用者にとって利用者しやすいように計画、設置することが重要であるので、配慮後の改善も必要に応じて行われるなどさらなる改善への配慮も重要なこととされている。

#### Ⅳ. わが国の大学における障害を持つ学生への配慮

わが国においては、1970年代中頃から文部省の指導のもと、大学において重度の身体障害者の受け入れが徐々に進められてきた<sup>14)</sup>。とくに、入学の機会均等については文部省は、「昭和49年度大学入学選抜実施要綱」の中に、「身体に障害のある入学志願者については、その能力・適性等に応じた学部等への進学のを拓ける観点から、受験の機会を確保するように配慮すること。」という項を付加し、それ以降その配慮を求めている。これらの動きを受けて、各大学においては障害者の受け入れに関する検討がなされるようになり、しだいに重度の障害を持つ学生の入学が進められるようになった<sup>15)</sup>。

障害を持つ学生の大学入学後については、講義・実験・実習等の授業を履修し、文化的・体育的・日常的な諸活動にも参加し、障害を持たない学生と同様に学生生活を過ごすためには、大学においてさまざまな配慮が必要である。わが国の大学においても実際に授業における配慮が80.4%の大学で実施されている。この配慮の内容は、「補助機器の使用」「補助者の同席」「手話通訳者の配置」「点訳教科書などの準備」や「定期試験での配慮」などである。しかし、各大学で行われている配慮の内容については、内容に程度差があるものとみられる。これらの授業全体に対する配慮について、大学がガイドラインを作成し各教員に示しているのは5%の大学にとどまっており、実際には「障害学生が履修していることを担当教

員に伝える」「障害学生への配慮内容を担当教員に依頼する」「各教員が配慮していることを把握する」などの内容が多く、より積極的な具体的な内容を講じている大学は少ないものとみられる。

配慮のためのサポートシステム、すなわち障害を持つ学生の総合的支援体制の有無であるが、「障害学生からの相談窓口を設置している」「総合的支援体制がある」「障害学生の問題解決を図る委員会がある」などの支援体制が整備されている大学もみられるが、総合的に問題を解決していく部局がある大学は少ないと指摘されている。したがって、問題解決も対処的なものとなっていると考えられる。

物理的なバリアフリー化については、障害を持つ学生に対しても施設設備を安全に利用可能でなければならないので、バリアフリー化を推進しなければならないことは言うまでもないことであるが、それは必要に応じて整備が進んでいるという状況である。しかし、近年では、高齢者や身体障害者が使いやすい施設設備は、すべての人にとっても使いやすいという観点から、ユニバーサル・デザインとして捉える方向が重視されているなど<sup>16)</sup>その整備の必要性は言うまでもないことである。バリアフリーの整備の施設設備においてとくに対象となる内容は、イギリス文部省の建築局で出版されているデザイン・ノート18の第二版(1984年)「教育施設への障害者のためのアクセス」が参考とされるが、そのなかでは、最低限の配慮事項として次の項目があげられている。駐車場・車乗降場、アプローチ、スロープ、手すり、出入口とドア、階段、エレベーター、便所、休憩室、避難手段<sup>17)</sup>である。大学においては、その他に施設や設備として、座席、点字ブロック、点字・拡大文字表示、対面朗読室、ループアンテナ、FM補聴器などが必要と考えられる。しかし、わが国の学校施設においては、身辺が自立している車いす使用者の場合においても、大学の校舎がバリアフリー化されていないため、援助を付けることを前提に入学する学生もおり<sup>18)</sup>、大学施設設備自体が利用者にとって快適に利用できる状態になっていないものと思われる。したがって、移動面におけるバリアフリー化についても、現状では充分とは言えず、早急に改善する必要がある。

このように、わが国においては、障害を持つ受験生に対する配慮はしだいになされるようになってきたが、その後の学生生活については、基本的には自立を前提にして自分で現状のなかで学生生活を過ごすことが要求されていると考えられる。しかし、そのための施設設備の整備状況は不十分である。適切な整備や配慮が行われずに自立した学生生活を送ることは不可能であるので、障害を持たない学生と同等に学生生活を送るための最低限

の整備や配慮が望まれるところである。

## V. 障害を持った学生への配慮・支援についての大学の責任

障害を、ハンディキャップを起こす状態を環境が作り出している状況と定義でき、大学の責任は、ハンディキャップを起こすような条件やバリアをすべて取り去ることにあると指摘されている<sup>19)</sup>。したがって、アクセスできるかどうかなどの環境の状況は教育上の問題というよりは、学生がうまくやって行くのを妨げる態度上のバリアであると捉え<sup>20)</sup>、すべての学生に対して同様に可能とするように援助する必要がある<sup>21)</sup>。日本国憲法及び教育基本法第3条の教育の機会均等において定められているとおり、また、判例の「障害者がその能力の全面的発達を追求することもまた教育の機会均等を定めている憲法その他の法令によって認められている当然の権利である。現在の施設・設備が不十分なことは入学を拒否する理由とはならない」(神戸地裁平成4・3・13判)のとおり、学習する環境が学習する者にとって利用でき、学習できるように整備されていなければならない。

最も基本的な大学キャンパスのバリアフリー化に関する当面の具体的検討課題をまとめてみると、車いす利用学生のための移動面における段差の解消、エレベーター設置、車いす対応トイレ設置、専用駐車場の設置、雨雪のときの屋根付きの教室間通路、スロープ教室、車いす対応の机や電話台などの整備、車いすで生活できる学生寮、休憩室などの整備等が考えられる。また、視覚障害を持つ学生のための施設設備、授業のプリントやレジュメなどの点訳・音訳・対面朗読のサービスなども各大学が担当教員と相談しつつ、専門的内容の情報保障手段の開発も期待される<sup>22)</sup>。

このように、さまざまなバリアをより少しでも取り除いて行けるような方策が必要である。これらのバリアフリー化は、学校施設において最低限必要な措置であると考えられ、さらにソフト面の支援体制も確立し、入学試験、授業場面、課外活動場面などの学生生活のそれぞれの場面で障害に対応した、配慮・支援を行っていく、社会的な責任が大学にあるものと考えられる。

## VI. まとめ

近年、わが国においても、学校教育における統合教育の推進が指摘されているが、今日の北アメリカでは統合教育よりもインクルージョンが就学前から高等教育までの一貫した教育の価値となりつつある<sup>23)</sup>。したがって、児童・生徒・学生に、障害を持つ者と障害を持たない者が同一環境で教育を受けることに重点がおかれているの



で、カナダの大学においても、そのための物理的なバリアフリー化などのハード面、学習サポートなどのソフト面で支援体制が整備され、実際にさまざまな配慮がなされている。

一方、わが国の大学においては、大学の受験の対応や物理的移動面におけるバリアフリー化は進みつつあるが、学生生活のすべての面における支援や配慮については、従来の施設設備のなかで受け入れるということが中心となっており、障害の種類の応じた総合的な支援を実際に行っている大学は多くはない。

わが国では、学校への入学で障害を持つ者の場合には「障害者を受け入れる」「障害者を受け入れるためにはどのようにしたらよいか」と表現されることが多いが、カナダでは、障害者を持つ者と持たない者を区別することは無く、誰でもが同様に学習することが当然の権利として捉えられている。そのために、さまざまなサポートやそのためのシステムが確立されており、入学前の相談、入学、卒業、就職まで、教職員がさまざまな場面でかわりつつ、その対応が一貫してシステムとして整備されている。これらの背景には、人権への高い意識があり、人々の意識上のバリアフリー化も図られているものと考えられる。この意識上のバリアフリーは、具体的に障害を持つ者が障害を持たない者と同様に快適に学生生活を送るための施設設備などの整備や配慮などの面に現れているものとみることができる。

わが国においても、学校施設は公共的な施設であるので、誰でもが利用可能でなければならないものであるもので、より積極的なバリアフリー化を図る必要があるとともに、物理的な支援だけではなく、社会的な支援も育てて行かなければならない<sup>24)</sup>。この際、態度がもっとも重要なバリアであるという<sup>25)</sup>。したがって、意識上のバリアフリー化から、さまざまな面における、サポートシステムの整備にかかわりつつ、その対策を明確化し整備・確立をしていくことが、わが国での急務な課題であると指摘されている<sup>26)</sup>。わが国の大学においては、サポートシステムの構築はもとより意識上のバリアフリー化についても、障害を持つ学生と持たない学生が共生するなどをとおして図っていくことが今後の課題であると考えられる。

#### 注・引用文献

- 1) 文部省編「平成11年度我が国の文教施策」大蔵省印刷局 p.478 (1999)
- 2) 「同上書」 p.478
- 3) 文部省編「平成12年度我が国の文教施策」大蔵省印

刷局 pp.324-328 (2000)

- 4) 小川信子 野村みどり 阿部祥子 川内美彦共編「先端のバリアフリー環境」中央法規出版 p.34 (1996)
- 5) 富安芳和 小松隆二 小谷津孝明共編「障害学生の支援」慶應義塾大学出版会 p.122 (1996)
- 6) VICTORYA大学:学生数17000人で、障害を持った学生は200名ほど在学している。大学では、専攻科目が多数おかれており、教育の質の良さ、研究レベルの高さ、地域への貢献度のすべてにおいて、高い評価を受けている。ビジネス、教育、工学、美術、人文、法学、化学、社会学などカナダで最多の10学部41専攻科目がある。キャンパスには、4図書館、2体育館、プール、テニスコート、ウエイトレーニングルーム、映画館などが完備されている(海外進学センター編「留学ベストガイド」2000年 三省堂)。
- 7) BRITISH COLUMBIA大学:35000人の学生数を誇り、カナダで3番目に規模が大きい大学である。12の学部と10のスクールを持ち、大学には、会計学、ビジネス管理、コンピュータ・サイエンス、経済学、教育学、美術、看護学、政治科学、人類学、歴史学、土木工学、音楽、地球・海洋科学などの専攻学科がある(海外進学センター編「留学ベストガイド」2000年 三省堂)。
- 8) CALGARY大学:カルガリー冬季オリンピックが開催された地で、大学のスケートリングなどの施設がオリンピックにも使用された。医学、生涯教育、スポーツなどの専攻がある。
- 9) SIMON FRASER大学:探検家の名前が付けられた大学で1965年に設立された。18500人の学生が在学しており、メイン・キャンパスは建築賞を受賞した有名な建物である。会計学、ビジネス管理、コミュニケーション、コンピュータ・サイエンス、政治科学、社会学、物理学、統計学などの専攻学科があり、国内トップクラスと評価されている(海外進学センター編「留学ベストガイド」2000年 三省堂)。
- 10) 総理府編「平成7年版 障害者白書」大蔵省印刷局 pp.3-26 (1995)
- 11) わかこま自立生活情報室編『大学における障害者受け入れの現状』「大学案内2001 障害者版」障害者団体定期刊行物協会 (2000)
- 12) 次の論文を参考にした(天野栄一 大西哲 佐藤尚人 都築一治『障害者の高等教育に関する全国調査'93』「流通経済大学社会学部論叢」第4巻第2号 1994, 3)。
- 13) 富安芳和 小松隆二「前掲書」 p.30
- 14) 野村みどり「現代の学校にもとめられるバリア・フリー環境」慶應通信 p.157 (1989)

- 15) 「同上書」 p.159  
16) 年鑑辞典編集部編「知恵蔵2000」朝日新聞社 p.1120 (2000)  
17) 野村みどり「前掲書」 pp.268-269  
18) 「同上書」 p.167  
19) 富安芳和 小松隆二 小谷津孝明共編「前掲書」 p.75  
20) 「同上書」 p.75  
21) 「同上書」 p.76  
22) 小川信子 野村みどり 阿部祥子 川内美彦共編「前掲書」 pp.262-263  
23) インクルージョン教育は、包み込む教育で、障害のあるなしに拘わらずすべての子どもを学校に包み込むことである。アメリカでは、少なくとも高等学校までの教育が徐々に、隔離教育から包み込み教育に変わりつつある。(富安芳和 小松隆二 小谷津孝明共編「前掲書」 pp.130-131)  
24) 富安芳和 小松隆二 小谷津孝明共編「前掲書」 p.141  
25) 「同上書」 pp.42-43  
26) 野村みどり「前掲書」 p.157
- 付 記
- この研究は、「平成11年度北海道女子大学（現：北海道浅井学園大学）北方圏生活福祉研究所研究費」の交付を受けて行ったものである（『北方圏に於ける福祉環境の視察 教育環境』）。
- [2001年 6 月30日受理]

## Report of Support at University in Canada to Student with Disabilities

Jun Shiraishi Northern Regions Research Center for Human Service Studies

### Abstract

At four universities in Canada, the content and method support to student with disabilities were investigated. Result of investigation, the student with disabilities is doing the independence life. There are much supports for the independence life. For instance, in facilities of the university, the barrier is free - it is an installation of a slope, an automatic door, and the elevator etc. In study and daily life, various support is performed. Thus, to send the student life pleasantly just like the student where the student with disabilities does not have the trouble, the university is offering the support service.

In these backgrounds, there is high human rights consideration. The Conadaian does not have the barrier of consideration. However, consideration to he student with disabilities is too little in Japan. It is necessary to maintain support to the student with disabilities by the facilities equipment of the university in Japan.

Key words : Student with disabilities, Barrier Free, Higher Education, Education Facilities